

ホオズキ白絹病の防除対策

○¹⁾ 佐藤善人・吉田俊一

(¹⁾ 南部振興局・大分農林水産研花き)

【目的】

現在、本県ではホオズキが 21ha 栽培され、花き生産の主要な品目となっている。ホオズキ白絹病は近年、発生が増加する傾向にあり、一旦発病すると収穫皆無となることがあるため、ホオズキの重要病害となっている。このため、ホオズキの白絹病に対する各種薬剤の防除効果について検討を行った。

【材料および方法】

試験は、「大分在来大実系」を用いて、当研究所内で実施した。試験区の構成は、モンカット水和剤（1000 倍）区、バリダシン液剤 5（800 倍）区、フロンサイド SC（1000 倍）区、無処理区を設け、1 区 40 株の無反復とした。ホオズキ苗の根部を各供試薬剤に 5 分間浸漬した後に定植（株間 20cm、条間 40cm の 2 条植え）した。定植は 2006 年 3 月 31 日に行った。その後、供試薬剤を 2 週間おきに株元に 3 回灌注（100ml/株）した。汚染圃場の作成は、当所保存の白絹病菌（YMS-0501）をふすま培地で 22 日間培養した後、100 g/m²を定植 16 日前に圃場にすき込んだ。さらに、白絹病を発病させたホオズキの根部を圃場にすき込み汚染圃場とした。

調査は、白絹病の発生推移を定植 98 日後から約 10 日おきに 158 日後まで行った。また、草丈の推移を定植 43 日後から約 10 日おきに 89 日後まで行った。

【結果および考察】

モンカット水和剤区は、定植 158 日後の調査でも発病株を認めず（表 1）、高い防除効果が認められた。バリダシン液剤 5 区は、定植 98 日後の調査で発病株率が 2.5 %、定植 158 日後で発病株率が 30.8 %となり、（表 1）十分な防除効果が得られなかった。フロンサイド SC 区は、定植 98 日後の調査で発病株率 0 %、158 日後の調査でも発病株率が 2.5 %と低く（表 1）、十分な防除効果が認められた。無処理区は、定植 98 日後の

調査で 2.5 %の発病株率、定植 158 日後が 61.3 %の発病株率であった（表 1）。

モンカット水和剤およびフロンサイド SG は、ホオズキ白絹病に対して高い防除効果が認められたが、バリダシン液剤 5 は防除効果が低かった。

表 1 経過日数と白絹病の発病株率及び防除価

供試薬剤	発病株率(%)		防除価
	98 日後	158 日後	
モンカット水和剤	0	0	100
バリダシン液剤 5	2.5	30.8	51.9
フロンサイド SC	0	2.5	95.9
無処理	2.5	61.3	

定植 89 日後の草丈は、無処理区が 98.7cm、モンカット水和剤区が 87.7cm、バリダシン液剤 5 区が 86.6cm、フロンサイド SC 区が 65.1cm で、無処理区が最も高かった（表 2）。

表 2 草丈調査（定植 89 日後、25 株調査）

供試薬剤	草丈 (cm)	無処理比
モンカット水和剤	87.7	88.9
バリダシン液剤 5	86.6	87.8
フロンサイド SC	65.1	66.0
無処理	98.7	100.0

以上の結果から、ホオズキ苗の根部をモンカット水和剤または、フロンサイド SC に 5 分間浸漬した後に定植し、生育時に 3 回株元灌注することで、白絹病に対する高い防除効果を得ることができた。

なお、供試薬剤区、特にフロンサイド区は無処理区より草丈が低く、薬害について検討する必要がある。